

目次

第一章	面接官に自分を売り込む……（体験版収録分）	三
第二章	有閑人妻にバイブを売り込む（体験版収録分）	二六
第三章	有閑人妻にローターを売り込む	六六
第四章	奥手奥様に緊縛セットを売り込む	九〇
第五章	奥手奥様に搾乳機を売り込む	一一六
第六章	セールスマン、肉玩具になる	一三八

登場人物紹介

栗立 明利	（あわだち あかり）	主人公の妻。看護師として働く良妻。
間狩花 瑠璃	（まかりばな るり）	部長を務める才媛。主人公の面接官。
木野 撫子	（きの なでしこ）	暇を持って余す人妻。セックスが好き。
松本 千野美	（まつもと ちのみ）	着物有閑マダム。内向的で潔癖な性格。
栗立 草人	（あわだち そうじん）	主人公。訪問販売員に再就職する。



PDF閲覧ソフトを「見開き」に設定されている場合、
ページは右 左の順で表示されます。
但し、一枚ずつ表示する場合は乱丁となってしまいます。
ご注意ください。

第一章 面接官に自分を売り込む

筋の皺も、一部の緩みも作らずに着こなした黒いスーツの胸元に、ネームプレートが付けられている。そこにはこうあった。『戦略部部长 間狩花 瑠璃』。

どこもそうであろうが、草人の古巣も生き馬の目を抜く世界だった。しかし、それでも目の前の女性程の歳で 自分とそう変わらぬであろう年齢で 部署の長を任されたと言う例は聞いた事が無い。

緊張で卒倒しそうだ。自分はこの才媛にどう見られているのだろうか。好意的に見られていれば有り難いのだが。それは若い美貌の女部長へ対する下心からでは無い。この会社で働きたいと言う気持ちからくる焦りだ。

「履歴書によると、大変な経歴ですね。列举された資格や免許の数も驚きです」

「恐縮です」

「ですが、はつきり申しますと、当社では採用審査に当たり、志望者の個性を重視しております」

草人は思わず息を呑んだ。この会社を感じた魅力。それが思い違いなのかどうか分かる予感がしたからだ。

「優れた方は勿論貴重です。しかし、入社して頂いてからも、従業員教育と言う形で必要な知識やスキルを身に付けて貰う事は出来ません。ですから、何をしてきたかや何

第一章 面接官に自分を売り込む

栗立草人は企業の採用面接に臨んでいた。

会場は志望先である『株式会社ブライトライフ』の一室。表札には『戦略部』とあった。資料やファイルがぎっしり収まった本棚、パソコンや筆記用具が置かれてある机など、日々の仕事を匂わせる場所だ。

通常、面接は会議室などのガランとした空間なり、応接室なりで行われるものと思っていた。大学生時代に、アルバイトの面接や就職活動をしていた時はそうだった。それだけに、仕事部屋へ通された時、草人は目を丸くした。

「我が社を望まれた理由は良く分かりました」

滑舌の良い声が響いた。澁刺としているが低い、澄んだ湖水を彷彿とさせる声だ。

その主 面接官 にも、驚かされた。

輝く瞳が据えられた細い目。緩やかにしなつた柳の眉。口紅で赤い密やかな唇。彼女は端整な顔貌をしている。その上見るからに伶俐そうだ。

年の頃は三十路前と言う所だろうか。二十代前半と言われても納得しそうだが。一

第一章 面接官に自分を売り込む



チャモオ才に妻人
が出来るのはあまり重視していないのです」

女面接官はそこで一拍置き、改めてこちらを見詰める。志望者が自分を見ているのか、あるいはどんな反応をしているのか値踏みしているのだろうか。

ここまでは、草人は失望していない。今時の企業は、どこも即戦力を求めている。辞めた古巣もそうだった。その為 あらゆる企業もそうだと断言できないが

従業員教育は機会も内容も充実していない。

それは、従業員を代替可能な部品と同視する姿勢に繋がっている。直ぐ役に立つ人材を雇い、直ぐ役立つからこそ教育が不要で、そして都合で切る。

利潤第一の思想が根幹に据えられている事の現われた。そこには、働く人間にとって、会社が自己実現の場であるとか、他者との繋がりを得る場であるとか、生活の源泉である等の思想は無い。

この会社はそうした主流に反している。

「我が社が求めるのは、幾つかの資質を持った人材です。幸いな事に、栗立さんにはそれがある様に思えます。思い違いなのかどうか。確かめさせて下さい」

やにわに女面接官が立ち上がった。スムーズに黒服のボタンを外していく。後頭部で纏めていた髪を自由にしたのが仕上げだった。それで変身が完了した。

第一章 面接官に自分を売り込む

訳が分からない。心臓の拍動が早くなる。その原因は戸惑いだ。しかし、それだけでない事を草人は心の隅で理解していた。

「うっ……」

二人の距離が目と鼻の先まで縮まった時、白い手が伸びた。股間をさわさわと摩擦したのだ。白い女の手は、柔かくてひんやりしている。

むず痒い刺激が全身を打った。まさかとは思いつつも、こう言う展開を予想していただけに、身体の順応は早かった。

「少し触っただけでもうこんな……履歴書には配偶者ありと書いていましたが、奥様とはご無沙汰で？」

幹をなぞり、先端を探り当て、そこを重点的に撫で回す。強く、弱く、手で加える圧力を変化させながら、彼女は訊ねた。

「面接試験が決まってからは緊張して、それ所では無くて……妻は、リラックスさせようとして誘ってくれたのですが……」

「そうでしたか。夫婦仲が良さそうで何よりです。でも、そうであるなら、妻でない女性にこう言う事をされるのはお嫌では？」

所作を続けながら、こちらをじっと見て言う。

スーツの下から、身体のラインを見せ付ける服を纏った媚肢体が現れた。テカテカと光り、見ただけで硬質な、エナメル皮製と思しきワインブラックのワンピースに包まれている豊満な女体である。

胸を覆う部分のデザインはブラジャーと変わりない。子玉スイカと張り合える乳房の量感を強調している。肉果実は大ききさだけでない。ふっくらと丸みを帯びているそこは、球体に近い整い様だ。色ツヤも富んでおり、きめ細かい。

胸元から上腹、下腹へ至る輪郭は縦にひしゃげた『つ』の字。スマートな脇腹と大きなお尻のコントラストが、くびれの深さを際立たせていた。

ワンピースのスカート部分は、上腿の三分の一程で終わっている。そこから下は、ガーターベルトストッキングが支配する黒の領域だ。濃黒で覆われたムッチリとした太腿と、その上の白い肌は互いに艶かしさを強めている。

腰まで届く長いサラサラの髪がゆさゆさ揺れた。自身のオンナ振りを誇示する麗悧が、面接を受けに来た若い男性に近づいてきたのだ。

「そのまま置いて下さい。まだ面接中です」

思いもしない展開に、いつの間にか腰が浮いていた。咎められて座り直す。

(どう言う事だ……?)

第一章 面接官に自分を売り込む

「ああ……はああ……」

理知的な面が崩れ出す。赤い唇から艶かしい吐息が漏れ出した。細い眉が八の字に歪み、瞳が潤んでいる。目の下から顎にかけてが白から朱色に変わる。

興奮している証左だ。キャリアウーマンが、無職男の肉体で興奮している。ビジネスと言う戦場の中で、キビキビと言葉を紡いでいるであろう口から、湿っぽいオナラのサガが滲み始めている。

「はあ……んっ……そろそろ……私の背中に手を回して支えていて下さい」

愛妻がいる夫は、妻でない女性の背中に手を伸ばした。一方の彼女は両肩に手を置いてきた。腰を浮かせて、そそり立つものに照準を合わせる。

狙いが定まると、ひんやりした指で男根の先を摘んだ。自身が掴む赤黒い肉端を見詰めながら、ゆっくりと腰を沈め

ぐちゅり……。

「はアあああ……」

整った顔貌が一瞬、大いに蕩けた。目と鼻の先での決壊だった。甘くて熱い、生の吐息が顔にかかった。

「んんっ……実際に啜え込むと……根元まで飲み込んだら一体どうなるの……」

「いえ、嫌ではありません。これも試験なら。先程も説明させて貰った通り、是非とも御社で働きたいですから」

「分かりました。真摯さを見せて下さいね」

人妻にオモチャ
丁寧なスーツを脱がせ始めた。志望者は成すがままだ。

「触り心地から予想していましたが、ご立派なものをお持ちですね」

邪魔な衣類から解き放たれた男根は既に充血していた。そんなオトコの様子を見詰める彼女の頬は赤い。うっとり魅入っている風にも見える。意思の光で輝く瞳に、情欲の炎が見え隠れする。

「じつとして下さい……」

丈が短いスカートを捲り上げた。その下には下着が無い。叢も無い。剥き出しになっているぼつてりとした女唇が現れた。陰唇の間は、控え目にパクパクと開閉している。面接官は、曝け出したオナナと膨張した男根の裏側をピトリと密着させた。

シユツ、シユツ……ぬちゅ、シユツ、にゅちゅっ……ぐちゅっ、にゅちゅっ。

指で勃起を押さえつけたままで、腰をくいっ、くいっど動かし、陰肉のレールを往復させる。草人の下半身に甘い痺れが走る。程なくして、女唇の間から愛液が滲み出てきた。それに伴い、少しづつ往復運動が滑らかになり、水音が増していく。

第一章 面接官に自分を売り込む

じゅぶっ、じゅぶっ、じゅぶっ、ぬちゃ、ぬう〜……………ジュブウ！
股間同士をねちっこくキスさせ、かと思うと亀頭の先端ギリギリまで引き抜き腰を叩きつける。ゆるゆると刺激して、疼きを蓄積させる事を主眼に置き、緩急をつけて腰を振りたくる。

「うあっ、上手い……………」

飲み込まれる勃起と、結合部分である股間は元より、下腹と太腿にも愛液が飛び散って筋を作っている。下から昇ってくる生々しい匂いが鼻を突く。

「あふう……………うふうふう、もう堪らないって顔ですね。もう限界ですか？ ご無沙汰との事でしたから、無理は無いのでしょうか」

言われた通りだ。下半身は、勃起を除いて感覚が殆ど無くなっている。頭もぼうつとする。採用面接の日時が決まって以降、緊張してそんな気になれず、妻との交わりも自慰もしていなかったツケが現れている。

相手が、美しい上に優秀な女性である事も無関係では無いだろう。その上、肉体の淫らさも人一倍だ。

動く度にたゆんだゆん揺れる巨乳。肉棒を包み込み、奥へと引き付ける女筒。気高い彫像とさえ思わせた面接時の姿とは真逆である、オンナの魅力を見せ付ける扇情的

対面座位の格好で、面接官と志望者は繋がっている。彼女は呟くと、妻だけに許されるオトコを膣内の奥深くまで飲み込んでいく。欲情の体液で又メル内部は、勃起をきゆうきゆう締め付ける。柔かく狭い。馴染み深い妻の肉壺とはまた違った感触だ。

「熱いぬかるみで……やわやわと絡み付いてきて……うう……」
腰を押し付けられる事で、亀頭が強制的に、閉ざされた媚肉をこじ開けていく。割り込み自体は容易だが、その後に襲い来る食い締めが尋常では無い。熱と又メリを帯びた肉感ある真綿で締め付けられるところなるのかも知れない。

「ナカの勃起がビクビクして……ヒダヒダを押しつけようとして……んっ……」
彼女の感覚は反対の様だ。膣内を拡張されている感覚が強いらしい。
コッソ。

女壺の中で膨張を続ける亀頭の先端が、子宮口に当たった。膣内の蠢きが一際強くなった。奥へと誘う動きが活発化する。

「んふう……はあうあ……本当に奥まで届いた……はああ……生のものをここまで受け入れるのは……ふうっ、いつ以来かしら……」

これから味わうものへの期待からか、口元が綻んでいる。妻も晒してくれる、男冥利に尽きる弛緩顔だ。ほうっ、と溜息を吐くと彼女は草人の肩を抱いた。

第一章 面接官に自分を売り込む



人妻にオモチャな姿。ほんのり漂う香水と、気化した生の匂い。

肉体に施される快感と、視覚による興奮、そして嗅覚への刺激が相乗効果を生み出して、妻帯者の昂ぶりを強めている。

「私の中で凄く膨らんでいるのが分かりますよ。ビクビク暴れてもいますね。いいですよ、我慢しないで出して下さい。欲求のままに、私を妻だと思って思い切り」

緩んだ赤ら顔が、穏やかに見詰めてくる。この顔には覚えがある。妻が自分の絶頂を受け止めてくれる時の表情だ。

ガシッ！

行為で煮えたぎった頭が沸騰した。堪らなくなった。妻でない女性を抱き締めた。彼女と息を合せて腰を振り合う。微笑む美女と視線でも抱き合う。妻との情事で感じる多幸感と、オンナへの強い好意を感じつつ、妻帯者の男は言葉に甘えた。

ドビュン！ ドクツ、ドクツ、ドクンツッ！

「あつ……熱い塊が……濃縮された精が私の中に……あ……」

妻にするのと同じく、亀頭と子宮口を密着させて、腰を小刻みに振る。湧き上がる衝動のまま、全てを注ぐつもりで。

落ち着くまで時間がかかった。息が整うと彼女は結合を解き、秘所を広げた。

第一章 面接官に自分を売り込む

界値を見せて下さい。それが最後の試験です」

課題を言い渡すと『頑張ってください』とばかりに、穏やかに微笑んでくれた。

満足させるとは、つまり、絶頂を与えてやると言う事だろう。精根尽きるまで云々と言うのは、気絶するまでやり続けて見せると言う事か。

それらを遂行するのは難しくない。妻にしている事をすれば良いのだ。しかし、ただでさえ他の女性に夢中になってしまったと言うのに、妻にだけ披露する夜の技術を行って良いのだろうか。

掛け替えのない愛妻への裏切り。その意識がのしかかる。

「どうしました？ 出来ませんか？」

部長らしい声に、悩む草人はテスト時間を終了させられる恐怖を感じた。この会社へ感じた期待と、前の会社で感じた失望。そして、失職中に消える事が無かった惨めさと妻への負い目が頭の中で弾けた。

(ごめん、明利っ！)

腹を括った。何でもやってやる。

「いえ。やらせて下さい」

瞳に決意の光を載せ、こちらを見る細い目を見詰め返した。

くばあ……どろおっつ。

したたかに注ぎ込んだ粘っこい黄濁が、重力に引かれてゆっくりと落下し始める。

膣口から会陰に垂れる。そのまま肌を離れて落下する雫もあったが、入り口から外気に触れる女唇に寄り道する筋もあれば、後穴にまで黄色の道が形成されもする。

「いっぱい出ましたね。黄色がかつて、本当に溜め込んでいたのですね……」

そおっ……ちゅぱっ、ちゆる……そろっ……くちゅ、むちゅっ……。

白くて細い人差し指が、性器の周りに付着した濁液を掬い上げ、口に運ぶ。手についたチョコレートを舐める童女さながらに、美しい部長が男の体液を舐めしゃぶる。

「うんっ……強い生臭さ……濃い味……精液も遅しいのですね……」

嫌な顔一つせず、それ所か恍惚として、搾り出した精を味わい続ける。

「はああ……ごちそうさまです」

真っ赤な唇についた汁の一片を赤い舌で舐め取ると、彼女は告げた。

「さて、なかなかの資質を見せて頂いた訳ですが、まだ不十分です」

興奮の色が引かない肌。露出度が高い衣服の乱れはそのまま。だが、瞳の輝きと口調だけは役職に相応しい物に戻っている。

「私を満足させて下さい。それと一緒に、精根尽きるまでまぐわいを続け、精力の限

間にある深い凸凹が重なる瞬間を見続ける。

男の体液と女蜜でテラテラしていた勃起が、精に塗れた女穴に吸い込まれていく。ゆっくりと、亀の歩みで。

「つう……一度射精したのにまだこんなに熱い……硬い……」

赤い口から跳ねた声が飛び出た。赤ら顔の眉間が歪んでいる。片方の瞼が降りて目に皺が出来てもいる。

「瑠璃さんの中も熱くて柔らかくて、とても気持ち良いです。かき回されて疼いてましたよね。済みません、一人だけ気持ち良くなって。でも、もう独りにしませんから」
先端にコリコリと言う感触を感じた。子宮口に到達したのだ。最先端と最奥がガツチリ噛み合った事を知ると、草人は抱擁を強める。豊満な肉体と、自身の無骨な肉体をピッタリとくっつける。

胸板に、肉果実のまるやかな心地良さが広がる。先端の乳首はコリコリに立ち上がっていた。自身の乳首と舐め合わせると女面接官の眉間の皺が深まった。

ぎしっ、ぎしっ！

パイプ椅子の耳障りな音が鳴り響く。向かい合って座ったまま、草人が上体を揺らした結果だ。

第一章 面接官に自分を売り込む

人妻にオモチャ

「ひとつだけお願いがあります……今だけ、名前を呼ばせて貰って良いですか？」
やるからには本気でやる。全力を尽くす。その為にはそれが必要だ。挑む間はこの人を妻と見る。そうしなければ、蕩けさせる事など出来やしない。

「構いません」

間狩花瑠璃は頷いてくれた。それが合図になった。

背中に手を回し、離れていた柔かい身体を引き寄せた。吐き出した体液を漏らす秘所に指を当てる。そしてゆっくりと肉裂を広げる。

「ごぼおつ……」。

開かれた場所から、種汁が零れだす。後から後から。思った以上に注ぎ込んでいた様だ。本妻を相手にした時も、これ程放った事はあつたらうか。

受け止めた本人も、一緒になって眺めていた。時間を置いた間に引いていた赤みが頬に戻り始めている。息遣いも平素のそれではない。

彼女が見詰めている中、背中に回した腕の片方を、たっぷりとした尻肉に回す。力を込めればズブズブと指を飲み込む尻たぶらをグツと握る。

「挿入しますよ。目を逸らさないで見ていて下さい瑠璃さん」

一時の妻となった女性の名前を呼んで、緩やかに命じる。彼女は逆らう事無く、股

第一章 面接官に自分を売り込む

施される所作に従順な彼女が心底可愛い。

もつと鳴かせたい。試験を抜きにしても高みへ上って欲しい。

「ああアー！ ひぐつ、そんないっぺんにされた んッアアー！」

雄叫びの原因を複数、同時に責める。上体を倒してぐつと差し込んだ瞬間に尻肉を撫で回し、入り口付近まで戻った時には動かず、埋め込んだまま脇腹を撫で回す。掌から力を抜き、羽ペンの羽で微細なゴミを集める心地でそろりそろりと撫で歩く。

「くつう、んああ！ イクつ、アアー！」

ビクビクビクツ！

膣内に激震が走った。入り口がギュツと狭まり、奥が緩む。女が達した証である。

その瞬間、彼女はこちらをキツク抱き締めてくれた。

真っ赤な顔が呼吸を整えるまで、抱き上げた赤子をあやすつもりで 性感を刺激

する気持ちをゼロにして 背中を撫でてやる。本妻にそうする様に。

「はあ……はあ……… お上手なですね。こんなに乱れたのは初めてです……」

渡すか渡すまいか迷っていた恋文を、意中の男性に見られた乙女の顔とはこんなものかも知れない。それだけ、初々しくも、爽快感を感じる表情だった。

「良かったです。それでは、今度は精力をお見せしますから」

人妻にオモチャ

「ああつ……中が擦られ……て……っ……」

上体を倒せば挿入が浅くなり、起こせば深くなる。ベットにて正上位の体勢で睦み合う位の自由度は無いが、それでも差し抜きには変わりない。

「あうつ、そこは、そこばかり駄目ですう」

仰向けで向き合う体位と比べ、のしかかられる物理的、ないし精神的な圧迫感が無い分、膣内の様子が鮮明に感じられるのだろう。弱い部分を重点的に責められれば、あっけなく泣き言が繰り返される。

どんどん崩れていく理知的な貌。それを視界に捉え続ける。緩やかな出し入れを継続しながら。顔の僅かな変化も見逃さず、期間限定の妻が大好きな場所を探る。今日顔を合せただけの女性を丸裸にしていく。

尻たぶを撫で、脇腹を撫で、奔放に舞う長い髪を撫でる。又ル又ルの結合部を、やはり又メリを帯びた怒張で満遍なく決る。

「そんなつ、ふあつ！ あ、ああ！」

若い才女はどこも敏感だった。尻たぶを撫でれば背中がしなり、脇腹を撫でればこちらにぎゅうつとしがみついていた。髪を漉けば頬に擦り寄ってくる。膣内にある反応の良い部分を擦れば大いに声を上げてくれる。

第一章 面接官に自分を売り込む

と突っぱねられた。恐らくは生の口調で。だから終わらない。

「分かりました……では、いきますよ瑠璃さん」

緩みきった彼女の顔が輝いた気がした。これもいつもの事である。

ギシッ！ ギシッ！ ギシッ！ ギシッ！

上体を倒し、同時に腰を回して椅子の上に円を描く。単純な抜き差しに加え、捻りも加わる。女蜜と、何度か吐き出された雄汁の混合液でドロトロの内部が、雄棒で削られると共に攪拌される。

「ンッ！ 効くうっ！ 奥の奥までグリグリって！」

会ったばかりの時に見た、出来る女の面影が微塵も無い。

隙無くスーツを着、精力的に仕事を行う場所で、はしたない台詞を連呼する。

「グリグリって、どう言う事ですか？」

知っていて問う。理解したから訊ねてやる。

「草人さんの、強いもので、私の、膣内の一番奥をグリグリ抉られていますっ」

「どこですか？ 場所は？」

「私の職場で……一生懸命働く場所ですっ。そこを寝室代わりにしてます」

「戦略部部長の間狩花瑠璃さんは、大事な職場で、千々に乱れている訳ですね」

「ダメツ！ こわれちゃう、またイカされたら、アア！」

ビクビクビクツ、ビクビクビクツ！

背中が弓のたわみを示した。頭も仰け反り、髪がパサリと舞う。

面接開始から三時間。女部長と若い志望者は椅子の上で交わり続けている。もっとも、前者の方はグロッキー状態だ。

顔と言わず身体中が汗みずく。魅力的な肉体を更に魅力的にしている衣装も汗塗れである。汗と愛液と言った生々しい匂いが部屋に充満している。その中には草人のも混じっている。

採用される為に、腰を振り、身体を駆使した。洞察力を途切れさせず、反応を逐一見届け、分析し、弱点を責め、手管を試行錯誤した。一時的な愛妻と思つた女に自身の汗と精を擦りつけ、染み込ませ続けた。

若き女部長は無職の男に、勝つて知つた箱庭にされ、好きな様に弄られた。

「んくつ……はあ……それじゃ、合格ですか？ 認めて貰えますか？」

「……まだダメ。これ位じゃあ、認められないわ」

一時間程前からこれが反復している。どんなに弱々しく泣き喚いても、認定を迫る

第一章 面接官に自分を売り込む



人妻にオモチャ

ビクンツ！ ビクンツ！

膣内の締め付けが増した。マゾ気質がある様なのである。非常識な事をしてると自覚させれば、オナナの反応を強く示すのだ。

「初見の男を試験と騙して、性欲を解消してるのですよね、戦略部の女部長様は」
ビクビクビクツ！

「これって一種のセクハラですよね？ 地域に愛される『ブライトライフ』の一員として恥ずかしくないのですか？ 日陰者とされがちなのに、それでも人と社会に貢献する姿勢に感動して志望したのに、幹部がこんな嫌らしい人だなんて幻滅です」

ビクツ！ ビクウツ！

瑠璃は言われるままだ。こちらにひしつとしがみつき、顔を伏せているので表情は分からない。が、罵声を浴びせられて喜んでる事は勃起に伝わってくる。

「そこまで言われたのにこんなな食い締めて。良いですよ、そんなに射精を受けたいのなら浴びせてあげます。野良犬みたいな男の子供を妊娠するといいよ、瑠璃」

子宮口を、鈴口の肉で小刻みに突いた。

ビュルツ……………ビュツ……………。

ビクビクビクビクビクビクビクツ！

第一章 有閑人妻にバイブを売り込む

粟立明利は夫の帰りを待つていた。

新しい働き口を見つけた夫の草人は、一ヶ月間家を留守にしている。会社の新人研修に参加しているからだ。研修は会社に泊まりこみで行われている。

「早く帰ってこないかなあ」

若妻はダイニングルームのテーブルに頼杖をついて待っている。目の前には手ずから用意したご馳走。看護師の仕事が非番である事を利用し、腕によりをかけて並べたものだ。全て、帰宅する夫を迎える為に作った。

周囲が茜色の頃からこうして待っていた。もう外は黒が濃くなっている時刻だ。まだ夫は帰らない。いつ帰るのか、詳しい時間を連絡してくれればと少しは思う。けれども、それは大した事でない。何せ、今日帰る事は決まっているのだから。

それから更に時間が過ぎる。外へ続くガラス戸の向こう側は、すっかり暗くなっていく。人工の明かりと夜空の星。明利はそれらの光源をぼんやり眺めていた。室内の照明を消して。

第二章 有閑人妻にバイブを売り込む

人妻にオモチャ

「っ！」

マゾ部長の顔が跳ねた。だらしなく開いた口がパクパクと動いている。

これまで何度も放った為に、吐き出せた量はごく少量だろう。けれど、彼女の反応は大きかった。

数瞬、ピクピクとわなないた後、どっと倒れ込んできた。

「大丈夫ですか」

「……………」

「えっ、ちよつと、瑠璃さんっ」

返事がまるで無い。慌てて抱きとめた体を揺する。と。

「あ…………失神してしまったのね。ごめんなさい……………」

「良かったあ。試験はまだ続いていますか？」

「いえ。もう十分……………です……………合格です。これから宜しくお願いします……………」

草人は安堵の溜息を吐いた。

第二章 有閑人妻にバイブを売り込む



「ただいまー」

モチャ「何時間も、外を見るだけの彫像だった体が跳ねた。全然感じていなかった心臓の鼓動が、煩い位に大きくなった。テーブルの上に置いていたリモコンで照明を点ける。手が震えて苦労した。そうして、パタパタと玄関に向かった。

「おかえりなさい」

点けっ放しにしていた玄関の明かりに照らされて、待ち人が皮靴を脱いでいた。一ヶ月前に買ったばかりだと言うのに、色褪せている上に幾筋もの皺が走っている。

「ただいま」

夫はもう一度繰り返した。妻を見据えて穏やかに。明利はふと思いたって彼の顔を凝視した。最後に見た時と比べ、うつすらと日焼けし、彫りが深まっている。何よりの変化は生気に満ちている事だ。覇気が滲み出ている。以前とは比べるべくもない。

（良かったあ）

一ヶ月前まで夫は疲れきっていた。

大学卒業後、彼は上場企業に就職した。口さがない人々も羨む成功コースを進んでいた。でも、ある日仕事を辞めたいと相談された。

話を余さず聞き、明利はそれを受け入れた。幸い看護師として働いていたので、夫

つてくれた。役に立とうと励んでくれた。けれども、あまり効果は無かった。心身は萎えたままだった。

そんなある日、『株式会社ブライトライフ』の事を知った。大人向けのお店に設置されたパンフレット無料配布コーナーに、その会社で作った冊子があった。

気さくな店主の話によると、同人誌と言う物なのだそうだ。その中には、性に関する事が事細かに書かれてあった。

セックスの意義、利点、危険性。性生活の素晴らしさや、それを充実させるハウツー、金銭面や行政の支援制度も含めた妊娠と出産に関わる事、そして、セックスの危険性。端的に言つと、病気や濫用による不幸の例。

とても本格的で内容は確かだった。決して、無料配布する価値しかない物では無かった。感心する明利に気を良くした店主が説明した。

『ブライトライフ』は主にアダルトグッズを製造販売している会社であるものの、一流企業も顔負けの地域貢献をしているのだそうだ。人間の性的な面を肯定的に捉え、得意分野から社会に参加しているのだとか。

自費出版の啓蒙書を小売店に置いて貰ったり、教育機関や子供会に対して、性についての出張講座を無料で行ったり、性生活に悩む成人カップルの相談所も務めたりと

第二章 有閑人妻にバイブを売り込む

チャを養う事が出来た。労わり、大事にし、相談に乗ってくれ、何より意思を尊重し応援もしてくれる幼馴染の夫を支えたかった。

自分で蓄えていた貯金も、雀の涙の退職金も、失業手当も、夫は全て家の支出に回した。楽しみのは一円も使わず。ハローワークに通いながら、家事に勤しんだ。妻には何もさせなかった。

痛々しかった。社会から転げ落ちたと負い目を感じ、喘いでいると見えた。会社に就職して働くと言う、当たり前前の事が出来ない事に罪悪感を感じている様に見えた。

夜中に目が覚めると、隣にいる筈の夫がいない時があった。そんな時に耳を澄ますと、廊下の奥からすすり泣きが聞こえた。『働けるだけ幸せ』。『仕事を選び好みするのが悪い』。そんな台詞がテレビから発信されると、夫は席を立った。

役目をあげて、役に立っている実感をあげられれば少しは元気になるのだろうかと思ひ、夫にしか出来ない事をねだった。夜の営みだ。

行った事も、生涯行く事もないだろうと思っていたアダルトグッズの店を調べ、一番の時に二人で梯子した。妻の人形同然になっていた夫は僅かに洩したが、殆どふたつ返事で随伴してくれた。

お店の商品を一一つじっくり見て、話し合っ一つだけ購入し、試す。彼は頑張

第二章 有閑人妻にバイブを売り込む



チャモオ才に妻人
色々しているのだそうだ。まるで自分を自慢する様に、店主は饒舌だった。

それが転機になった。話を聞き、同人誌を読んだ夫の目が変化した。濁っていた目がぐにやりと歪み、次いで輝きだしたのだ。彼は早速会社にアクセスし、面接試験の約束を取り付けた。

面接試験の事は微に入り細に入り聞いている。夫は相当気にしていたらしい。土下座までされた。

許す側にある妻は爪の先程も気にしていない。愛する人が、納得の上で、精力的に取り組めるかも知れない仕事場に入れたのなら、どうと言う事は無い。

そして、その気持ちは今も変わらない。こうして、夫の生き生きとした姿が見られるのだから。

栗立夫妻は久しぶりに夜を共にする。

夫は妻が用意した食事を喜んで平らげた。妻は夫の様子をニコニコと眺めていた。

その後、二人で入浴して身体の隅々まで洗い合った。準備は整った。

(ドキドキする……)

一ヶ月ぶりの夫は心身ともに充実している様子だ。男が上がったと言ってもいい。

第二章 有閑人妻にバイブを売り込む

「あ……あつ、ひあつ、だめ、そんなまだンンっ！」

指の腹を使って大陰唇をそろりそろりと数回撫で、ねじれの軌道で小陰唇に移る。敏感な肉部を摩られているのだが、感じるのは痛みでなく鋭い快感。動きは緩慢と言う程遅くないのだが、少しも粗雑さが無い。精確に陶醉感を与えてくる。

ちゅぷつ、くちゅつ……。

程なくして水音が聞こえ始めた。見えない部分がどの様に撫でられているのかが、感触と聴覚で伝わってくる。大事な部分を愛でられる実感が強くなる。

じゅぷつ、にゅぷりつ、じゅぼ、じゅぼっ……。

「ああつ、んっ、はああ〜」

体内に細長い物が入る感触。まだ幾らも時間が過ぎていないと言うのに、もう十分潤ってしまったている。潤滑油が溢れる源泉に、肉のブラシが入る。

力を入れず、表皮のみでコシコシ擦ってくる。五〜六度往復すると、次の区画へと言う具合に時間をかけて丹念に磨き上げていく。

「くうん、ふあ〜、あつ、あつ！」

この夜の為に禁欲を強いていた肉体が沸騰する。遠ざけていたとは言え、清楚な人柄とは言え、肉の悦びを知る人妻なのだ。粘膜を刺激される感覚を、急速に思い出さ

チャモオ才に妻人
とにかく、胸がときめく。

夫との夜に備えて自慰を我慢していた。その事も、心の高鳴りに拍車をかけているのだろう。何もしていないのに、身体がポツポツと熱くなる一方だ。

明利はナース服を着ている。職場の物では無い。草人と共に行ったアダルトショップで購入した物だ。と言う訳か、彼はこの姿をとても喜ぶのだ。

「それじゃ、いい？」

夫の呼びかけに妻は頷いた。二人の距離がどんどん縮まっていく。互いに視線を合わせ、早くも目だけでねちっこく抱き合う。

「ちゅっ……んっ……ちゅる……はむっ……」

唇が合わさった。口同士が繋がると、開通した粘膜の中で二枚の舌がぐねぐねうねる。上に、下に、右に、左に。唾液でぬめる物同士が、自分の唾液を擦り付け合う。

口の中に唾液が溜れば僅かの躊躇も無く飲み込み、体内に吸収する。二人共に。口付けは啜り合いにとどまらない。唇で唇を噛み合い、あるいは口内を這い回る。意思が通じ合う二人の所作は一瞬も躓かない。

「んくっ……ふああ……もう頭がぼうつとしてきちゃった……あんっ！」

状態が言葉になった刹那、下半身にごっごっした指が忍び込んだ。夫の指だ。

しようよ。ね？」

一度、叩き上げられてハイにされたからかも知れない。しらふの時に思い出したら赤面ものの台詞がさらりと出た。夫も夫で、喜色満面で首を縦に振った。

「次は、こう言うのを使おう」

いつの間に忍ばせていたのか。ベットの下角から、袋を引き出した。中にはガチャガチャと色々入っている。閨のお供だ。

封を開けると、夫は張り型を取り出した。硬く膨張した男性自身を模った物で、バンプ、偽根とも呼ばれる夜の玩具だ。ただ、男根には無い部分もあった。柄の部分の少し上方に鉤がついていた。

キャップ。ぬる〜。

袋の中にはオイルのボトルもあった。それを女裂に垂らされた。ひんやりとした液体により、火照りが中和されていく。蜜を噴きながらパクパクと開閉する部分が、瞬間にテカリ出した。

潤滑油の領域は外側にとどまらず、内部にまで及んだ。惜し気もなく手をオイル塗れにして、夫は絶頂させた膣肉に指で塗り込む。

「ッ……はぁア……うっつ！」

第二章 有閑人妻にバンプを売り込む

ヤモチオ才に妻人
せられる。

「顔が赤いよ。もうイキそう？ ん？」

下半身への責めを続けながら、顎の裏をレロレロと舐められる。発見され、育てられた性感帯への所作が、背中を粟立たせた。

「ごめん、一回イかせてっ」

「うん。我慢しないでいつて」

ぎゅっと片手が握られた。それが引き金となった。愛する人との、涙が出そうな程の一体感が身体を駆け抜け、二箇所が発生していた快感が爆発した。

「っ！」

目の前が弾けた。足の指が丸まり、全身がヒクヒクと強張った。そして脱力。トサツ。

崩れた身体を夫が抱き止め、そのままベッドに運んでくれた。

「はあ〜……気持ち良い……久々だわあ。凄い手馴れた感じだったけど、そういう事も研修したの？」

「うん、まあ。後で全部話すよ。それより、今日はもう満足？ このまま寝る？」

「ううん、草人がまだじゃない。それに、折角の夜なんだから、腰が抜けるまでしま

第二章 有閑人妻にバイブを売り込む

ない無機物でやり始める。すなわち、女柔肉のぞうきんがけだ。

「はああっ……うああう……んんっ、ナカが広げられて、擦られて あふうっ！」

指の時とは何もかも違う。擦り棒のヌメヌメ度合い。太さ。凶悪さ。標的と定めた場所にかかる圧力は強く、だからギュリギュリとされれば身体が飛んでしまう。

そして、相手は膣内にみっちり収まる巨根である。制圧領域の正反対に位置する部位も弱い圧力で刺激される。強さと弱さ。相反する二つは互いの威力を強調し合う。強い箇所には鮮烈な快感を。弱い箇所には焦れったさを埋め込んでいく。

ピンツ。

「ひやあああ！」

身じろぎを強制される最中、鉤状になっていた部分が陰核に触れた。ほんの少しだけ。興奮した男性器よろしく膨れ上がっていたそこは、感度も増している。

ピツ、ピツ……。

内部を擦り続ける傍ら、憎らしい程手首を上手に使い、鉤の部分で往復ピンタを繰り出してくる。

視界がぐにやりと歪んでいる。瞳が法悦の涙で濡れているのだろう。中味が抜け落ちたかのように頭が軽く感じる。身体が熱い。人工液体の冷たさがどこにも感じない。

達したばかりだと言うのに、冷やされた為か敏感さが戻ってきている。摩擦を軽減する事を目的に作られた液体は、肉の筆を酷くヌルヌルにしている。生の体液を纏って同じ事をされる時よりも、ずっと深く柔肉を昂ぶらせる。濡れた声が出てしまう。

「もういいね。では、本命いきまーす」

夫の珍しいふざけ声。場違いなそれは、妻の被虐心を掻き立てる。喘がされている事が馬鹿らしく思え、そんな馬鹿らしい事を止められない自分が恥ずかしい。その羞恥心が心を炙るのだ。

服を脱がされ、四つんばいにさせられた。又口ト口の部分を突き出す格好にならされた。恥ずかしい。でも、興奮してしまう。

ぐちゅにゅ……にゅちゅう……コツン、ツン、ツン……にゅちゅ、にちゅ。

入り口と同等以上の大きさに見える、作り物の先端があてがわれ、中に牛歩で進んでくる。みちゅみちゅと音を立てて、又メ又メの肉を掻き分けて奥を目指す様子が伝わってくる。聴覚と膣肉から伝えられる感覚で。

やがて奥が小突かれた。深所に辿り着いた事を確かめるかのように、二、三度叩かれる。ごくごく弱いノック。身体が盛大に跳ねた。頭の中がでんぐり返った。

息が荒くなっても構わず、指でしたのと同じ事を今度は、太くて逞しい、血が通わ

第二章 有閑人妻にバイブを売り込む

時に備えて禁欲していた心身を、心地良さを伴って蕩けさせてくれている。

だが、最高とは言えない。気持ち良さを享受しているものの、物足りない。やはり性器同士で繋がり、粘液を飛ばし合いながら擦り合い、奥にドクドク注がれた時の多幸感が欲しい。それが不在では、愛する人と性交に耽ったと言う実感が弱い。

「ねえ、そろそろズブってして。ね？ して欲しくて堪らないの」

「おっけー。実はこっちも挿れたかったから」

夫婦は数秒見詰め合うと一つになった。

じゅぶり。

揮発性の低いオイルは、新たに湧き出てくる愛液と一緒に膈内を潤している。無味無臭の人工液による滑らかさを、オナナの生々しい汁がセックスの匂いの度合いを大きくしている。

じゅじゅじゅつ……。

一息に奥まで達する事も出来る筈だが、夫はじっくりと歩を進める。閉ざされた肉膜を、肉で、力ずくでこじ開けられる悦楽を味わわされる。

「やっぱり、あなたに入れて貰う方がいいかも、あーっ」

一ヶ月強ぶりに、夫婦の合体が遂げられた。動物の交尾と同じ格好で。

チャモオ才に妻人
肉体の重量もあやふやだ。

「ふわあ、はあーはあーああ……んッ、あふあ、はやあ……」

夫に責められる妻は、艶かしい呻きと、激しい息遣いをひたすら続ける。身体中から汗が噴出し、むわっとしたフェロモンが周囲を包む。

「はあ……はあー……あッ！」

ビクンッ！ ビクッ、ビクッ！

汗みずくの裸身がしなった。身体が橋にならされ、アーチの限界地 完全に丸まると 度度痙攣。力を失いスプリングが効いたベットにどおっと倒れ込む。

「はあ、はあ……はあ……んっ……またイカされちゃった……」

「お疲れさま」

一方的に妻を叩き上げ、緩み顔を晒させたからか、夫はやたら嬉しそうだ。

「なんか上手くなってるね。こんなワンサイドゲームなんて今まで無かったでしょ」

「明利がされるがままになってくれてるからだよ。……こつ言っつのは嫌？」

「ううん。たまにならね……悪くないから」

実際、悪くないと言うよりもなかなか良い。苛められた腰、たわめられた背中に滞る薄い痛みは心地良いのだから。肉体だけでなく精神も消耗させられる絶頂も、この

身体は勝手に動いている。

頬から甘痛い感覚が消えない。顔を支柱にしてお尻を高く上げていているから。

乳首と胸の前側から鋭い熱さが無くならない。お尻を突き上げるついでに、宙に浮いたそれらを操っているから。硬いベットのシーツと擦らせる事で、乳悦を貪れる事を知っているから。

太腿同士がじつとりと汗ばみ熱い。膣の締まりを強くして、オトコを悦ばせようと励んでいるから。

きゆう〜っ。

絶頂の予兆が現れ出した。夫の精を搾り出す為に入り口が狭まり、夫の精を抱え込む為に奥が広くなっていく。

「くあっ、締まるう……明利、もう出るよ、出すよっ」

余裕绰々で妻を高みにやった夫の泣き声。伴侶の呼びかけに、自我が僅かに戻る。

「あなた出して、一杯出してえ。明利のナカにどくどくってたくさん注いで！ わたしももう直ぐだから、一緒に、いつしよにー！」

「明利っ、明利っ！」

膨れに膨れた、硬くて柔かい肉端が奥の割れ目にめり込んだ。

にちゅっ、じゅぶっ、じゅずっ！

腰を引き、突き出す。指や玩具でしていた時の様に、技巧をこらしてはいない。単純な抜き差し。

パンツ、パンツ、パンツ！

粘着質な水音の合間に、妻と夫の柔肉同士がぶつかり合う軽くて高い音。衝突の衝撃で、尻たぶがブルブル波打っているのが分かる。波打つお肉は大陰唇を揺らす。興奮が高まり、敏感になった性器を。

「んあぁっ、こんな、犬みたいにセックスしてるのに」

とても感じてしまう。今夜は二回、高みに担ぎ上げられたが、今と比較したら霞んで見える。

「シンプルなお出し入れなのにつ」

堪らない。膣内のどこもかしこも抉られ、終着点のコリコリを叩かれると、奥にある子宮が揺さぶられる。

「あなた、あなたあっ！」
程なく。

状況分析が出来る余裕が無くなった。ただ叫ぶ事しか出来なくなる。意識的には。

第二章 有閑人妻にバイブを売り込む



そのまま、ズンズンと言う震動が起こる。

「っ！」

ドビュンツ！ ドクツ！ ドクツ！ ビュルルルツ！

ビクビクビクビクビクビクビクビクビクビクツ！

最先端と最奥が密着したまま、夫婦は上り詰めた。

男根からはとめどなく、熱くて粘っこい奔流が放たれ続ける。

女筒は、ビクビクと震えながら、一滴でも多く搾り出し飲み込もうと、精力的にヒダヒダを駆使用する。

「この感じ……いいっ……あなたあ、もっとお……」

「うあっ……また出させられる……明利っ！」

ドビュンツ！

瑞々しい桃尻をガツシリ握りながら、夫はまた精を放つ。

「くうん！」

直撃の瞬間、妻はぎゅっと目を瞑り、受け止める快感を堪能する。

ドサツ。

力尽きた夫婦が、どちらともなく倒れ込んだ。暫し荒い息遣いが部屋を支配する。

何もする事が無い。

芸能やニュースなど、番組に興味が悪かれないのでテレビを見る気にはなれない。

ご近所と雑談を楽しむのは好きだが、他所の家に毎日お邪魔する訳にはいかない。撫子はインターネットを利用する主婦だが、ネットサーフィンするのも飽きている。

(一人えっちなでもしようかなあ)

与えられている小遣いを使い、コツコツ買い、結構な量の玩具を溜め込んでいる。

確かに、肉を弄り意識を白ませるのは爽快だ。だが、後には空しさがかかる。やはり人の温もりも欲しい。それに遊び尽くした感もある。最初の頃ほど楽しめない。

(旦那がベツトで頑張ってくれればなー)

毎日会社で働き、家の為に尽くしてくれ。触れ合う機会は減っているが、妻を大事にしてきている事は分かる。けれど、夜の務めも果たしてくれれば。仕事で疲れていたとしても、週に何度か、小一時間位は励んでくれないものか。

(浮気しようかしらねえ)

欲しい。肌と粘膜を触れ合わせられる異性が。但し、暇を充実に変えられるだけで済む、都合の良い人間が。厄介事を起こさない、家庭が壊れる原因にならない。そんな都合の良い男が。

第二章 有閑人妻にバイブを売り込む

人妻にオモチャ

「はあつ……幸せえ……生きてて良かったあ」

仰向けになり、横に広げた腕を妻の枕にしている夫が呟いた。いくら夜の営みを行つても、半死人だった頃には聞かなかった台詞だ。それを漏らした顔も、セックスの疲れは見えるものの、これまで見た事がない程、生気が満ちている。

一生懸命になれる仕事を得た事で精力を取り戻し、同時に、溜りに溜った鬱屈した思いが融解しているのだろう。そして、屈託無く妻を抱いた。主導権を握つて散々喘がせ、最後には一緒に果てた。仲良く心身を消耗し合った。

(良かったね、あなた)

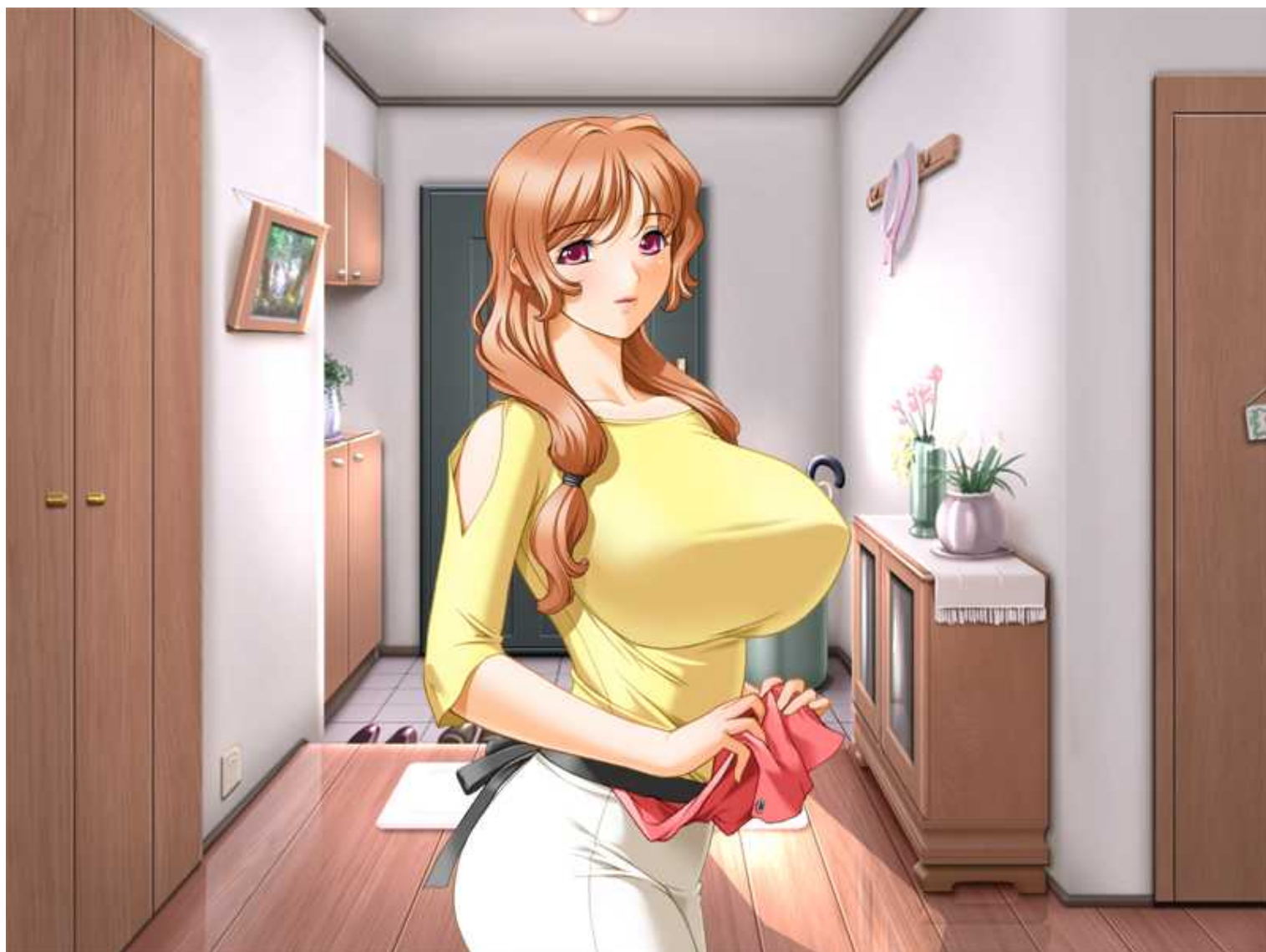
まだ火照りが引かない身体をぴたりとくっつけ、妻は寄り添った。

木野撫子は暇を持って余っていた。

リビングのソファアにどっかりと腰を下ろし、ガラス戸の向こう側に見える風景を眺めている。視線を上げれば薄水色の空と、白い入道雲。視線を下げれば、風になびく洗濯物。

家事一切は終わっている。今日も、帰宅した夫が眉をしかめる事はないだろう。そのクオリティーを午前の中に終了させているのだ。

第二章 有閑人妻にバイブを売り込む



チャモオ才に妻人

近所に住む思春期の学生を誘惑しようか。性に目覚めたらしい、女盛りの身体を視線で嘗め回す男の子達を。上手く手懐けられれば面倒は避けられるだろう。童貞を奪い、快感で躡けてやる。欲求不満の人妻は背徳的な妄想に浸った。

ピンポーン

チャイムが鳴った。我に帰った。誰だろう。トラックのエンジン音は聞こえなかったから宅配業者では無い筈だ。ご近所の奥様だろうか。

「はい」

土間に降り、覗き穴から来訪者を確かめる。そこには、まるで下ろし立ての背広で身を包んだ、若い男が立っていた。手にガマ口の大きな鞆を下げている。顔は十人前だが、表情がやけに明るい。背筋をピンと伸ばして佇む姿に好感を覚える。

(セールスマンかしら)

丁度良い。セールストークを聞くのは面白いかも知れない。楽しませてくれたのなら、品物を買ってもいい。軽い気持ちでドアを開けた。

「こんにちは。私はこう言う者です。宜しければ、少しお時間を頂けませんでしょうか。いえ、本当に少しですから。お忙しいのであれば、カタログだけでもお受け取り頂ければ幸いです」

何やら喋っているが、見るのに意識が向いている為、内容が頭に入っていない。

「で、おすすめは何？」

一通り見終わると、おもむろに訊ねた。

「はい、こちらの張り型をお勧めさせていただきます」

鞆から取り出し、未開封のそれを差し出した。旦那のよりも太く、長く、遅しい。

惚れ惚れする。正直、股の奥がきゅんと疼いた。柄の部分から少し上方が鉤状になっている。それでクリトリスも同時に弄れそうだ。

「バイブねえ。でも、こう言うのは飽きちゃってて」

「既にお持ちでしたか」

「いや、これじゃないのよ？ 他のメーカーが出してるのを持っててね」

「なら、こちらのハウツー本は如何でしょう。使い込んだ道具でも、意外な使用方法が見つかるかも知れません」

「へえ、こう言うのも扱ってるの……あれ、でも奥付に書いてる会社名が違いわよ」

「業務提携先の商品ですから。あ、どうぞ。じっくりご覧下さい」

「ふん」

成る程。ネット上で多くの知識を拾ったつもりだったが、知らなかった使い方がか

腰を九十度近くまで曲げてお辞儀。その後には淀みなく、躓く事もなく、聞き取り易い速度で一氣に言い放った。

手渡されたのは名刺だ。『株式会社ブライトライフ 営業部 栗立草人』とある。他にも会社の所在地や、このセールスマンの連絡先なども記載されてある。

撫子は嘖き出しそうになった。その原因は名刺である。エリンギの幹と椎茸の傘を合わせた矢印型をしている名刺。地の色は肌色。文字色が毒々しい青緑。

夜の玩具を買い集めた人妻は、来訪者が伝える会社の名前を知っている。アダルトグッズのメーカーだ。どこの通販サイトでも製品を幾つか目にする。そこがどんな企業かを知るだけに、名刺の奇天烈さも理解できた。

(おもしろいわ、この人)

人によつては激怒するかも知れない。けれども、撫子にはユニークに思えた。

「いいわ。丁度暇だったから、話を聞かせてくれるかしら。さあ、上がって」

営業マンは再度深く礼をした。家に上げてリビングでお茶でも飲ませながら話を聞こうと思ったのだが、彼は固辞した。土間で十分だからと。

「ふ〜ん、こんなにあるのね」

渡されたカタログを眺める。よく知る物、初めて見る物が混ざっていた。横で彼が

第二章 有閑人妻にバイブを売り込む

(セールスマンは、売ってなんぼでしょうに)

「構わないわよ。お勧めのそれを頂くから、それで実演して頂戴。セールスさんの実演が良かったらその本も貰うわ」

彼は深々と頭を下げた。礼を済ませると鞆を開いた。不要な物をしまい、密封されたビニールシートとオイルのボトル、袋詰めのおしぼりを取り出す。おしぼりで手を拭いた後、玄関口にシートを広げ、他の物の封を切る。

(冷静に考えると異様な光景だわねえ)

会ったばかりである赤の他人が玄関で淫事の支度をしている。夫に食べて貰いたくて、ウキウキしながら料理に精を出す若妻とはこう言う感じなのかも知れない。微笑ましささえ覚える様子が、違和感を打ち消している。

(どうにも、止めようって気も薄いみたいだし。そんなに欲求不満だったのかしら)

人妻として、冗談でしたと言うべきなのだろうが舌が動かない。その一方で、シートの上に置かれた張り型から目を離せない。本に書かれていたレスンも、ちらちらと頭に浮かぶ。

「……鍵かけてくれる？」

ガチャリ。

チャモオ才に妻人なり書かれてある。イラスト付きだった。文章も絵もかなり上手い。見ているだけでムラムラしてきた。

「あなたもこれ読んだの？」

「はい。お売りする品物ですから」

力強く断言した。瞳に確かな輝きが見てとれる。これまでの態度と合わせて判断すれば、恐らくは誠実な人柄なのだろう。寄りかかってもしつぺ返しは無さそうだ。撫子は深く踏み込んだ。

「……実演できる？」

「はい。ご希望されるのでしたら、承らせて頂きます。それでは、ご愛用の物をお持ち頂けますか？」

「？ それじゃ駄目なの？」

勧められた未開封の物を目で指した。

「新しい物をご購入頂かなくとも、こちらの本の具合をお知り頂き、お持ちの物で満足頂けたのでしたらそれが何よりですから。出費は少ない方が良いでしょう。勿論、お気に召さない場合は、この本をご購入頂かなくとも構いませんから」

真顔で言われた。堂々とした表情は微塵も揺らいでいない。

第二章 有閑人妻にバイブを売り込む

「失礼します」

ぬちゃ……にちゃ、ちゆにゆ、ぐちゆ~~~~~つ。

夫の物よりも遅しい先端が、秘部のオイルを塗り広げていく。大陰唇が終わると、ぐりぐりと分け入ってきてきて小陰唇に。ぬめりを帯びた太い先端が、縦長の花弁を秒速五ミリ位の速度でなぞる。

「っ……っ……」

頬がピクピク動く。身体に不必要な力が入る。

(うあ、結構感じる……他人にされると、また感じが違って……)

この程度の事は耳年増の人妻も知っている。だが、自分でした時と比べると格段に味わいが異なる。何もかもを思い通りに出来る自分がする時と異なり、容易に予測できない。その違いが原因の差なのだろうか。

ずちゅっ、にゅちゅにゃちっ、ぬちゅぬちゅっ。

膣口付近がテラテラになると、今度は膣内だった。亀頭部分だけを侵入させて、一箇所一箇所、少しづつ丁寧にヒダヒダをモップがけする。

「ああ……くうっ……ナカが擦られて……っ」

抑え様としても声が漏れてしまう。強く擦られると薄甘い電流が背筋を駆ける。力

重い金属音が、いつもよりも大きく聞こえた。

鍵をかけた彼は、オイルを手に塗り始めた。ぬちゃねちゃと、いやらしい水音が二人きりの家中に木霊する。

「こちらのオイルはサービスです」

「ああ、いいからいいから。それも頂くわ」

この期に及んでも礼儀を失わない。

(まあ、いいかな。いい人そうなんだから)

それで完全に納得した訳ではないが、状況に身を委ねる事にする。

「それでは、すみません。M字に座って頂けますか？」

下半身の穿き物を二種とも下ろして、言われた通りに座った。夫でも恋人でも無い男性に、秘めている場所が露になる。

「お綺麗です」

ぬる〜っ。

上から、ひんやりとした粘液を垂らされた。サラダにドレッシングをかける要領で股間をテラテラにされる。次はバイブの番だった。同じ風にして、鈍い色合いである無機物の表面がテカテカになっていく。

ゾクツ……。

「噂になるかも知れませんが、あそこの家の人は、昼間からあられもない声を出して、たと。一人でお盛んだったと」

ゾクゾクツ……。

不名誉な未来図を囁かれると、その様子が頭に浮かんだ。夫が働いている時に、他の男と楽しんだ拳句、それを元に噂される。だが、背徳の意識は行為の中止に働かず、快感の増大に繋がっている。

身体がどんどん熱くなる。背筋がサーツと粟立っていく。目の前に白が広がり、星が明滅を繰り返す。耳鳴りがする。力が抜けていく。気が遠っていく。

(頭がぼうつとしてきた……)

「イキそうなんです。いいですよ。行って下さい。イかせてあげますから」

酷薄な言葉を紡いだ口が、絶頂を誘ってくる。

冷たさと温かさ。その落差が意識を益々乱し、何も考えられなくなり。

ビクビクツ！

意識が飛んだ。硬直と弛緩が順に訪れ、脱力。

後ろに倒れ込む身体を、彼が受け止めてくれた。張り型を抜き取り、そのまま廊下

チャモ才に妻人
が込められている箇所、真逆部分では疼きが蓄積されていく。それらの作用が相乗効果をもたらして、身体を燃やし、ビクつかせる。

人妻の身をよじらせている彼は、こちらを見詰めていた。その表情は穏やかだ。まるで恋人を気持ち良くしている事に喜びを感じているかの様に。泣きたくなる程に優しい顔だった。

「ひあつ……そ、それ反則っ！」

柄の上部に位置する鉤が、クリトリスを平手打ちした。一度だけでなく、何度も何度も。人妻の膣内を掘削しながら。丸まった先端で、コツンと触れる程度の時もあれば、振り子よろしく肉芽を揺らす時もあった。

「ふああつ、やつ、ああつ」

「具合はどうでしょう？」

見れば分かるだろうに、わざわざ聞いてきた。

「そんなの、見れば　アアッ！」

奥をほじられた。羞恥を押してしようとした返事が中断させられた。代わりに裏返った嬌声を上げさせられた。

「そんなに叫ばれてはご近所に聞かれますよ」

第二章 有閑人妻にバイブを売り込む

「満更でもなかったんじゃない」

情事の予感に反応したと思う事にし、硬くなりつつある肉棒をさわさわと摩る。頭の上から、嫌がつている様子は感じられない。

「あはっ、いい物持つてるわねえ。こんなに大きくなっちゃうなんて。うちの旦那よりも遅しいわあ」

絶頂を味わわせた、女を喜ばせる為に作られた道具に勝るとも劣らないサイズだ。しかも、こちらはオモチャと違い、肉のしなやかさも温もりもある。

喚く心臓を煩わしく思いながら、皮を半分被った肉端にゴムの表面を当てる。精液溜りを摘みながら、皮を剥いてやり、クルクルと陰茎を滑らせる。

「はい、準備完了。ここじゃ狭いから、広い所に行きましょう」

皺がつくから背広とYシャツを脱がせた。シャツ一枚の軽装にさせて、移動を促す。撫子は、困らないのでそのままの服装だ。脱ぐのは面倒なので、半脱ぎのスカートも下着も引きずっている。

「さあ、来て。セールスマンさんの立派な物で、いやらしく熱くなっているココを鎮めて頂戴。お願いだから」

見せ付けるつもりで巨乳を晒す。たわわさを強調させる為に、階段の脇に聳える支

ヤモチオに妻に寝かせてくれる。

「お疲れ様でした。如何でしたか？」

「サービスが利き過ぎてたけど、まあ、良かったわ。……旦那もこれ位してくれればね……所で、スキンある？ 一箱くれるかしら」

空っぽになった女の部分がズクズク疼く。身体の火照りが全然引かない。

「はい。ありがとうございます」

くぱ。ジーツ。

小さな箱を開けた。手が震えて苦労した。平べったい一片を切り取り、封を切る。

「ああ、そのままのまま」

ゴム片の端を啜えてセールスマンの腰に擦り寄る。膣の呻きが増す。

「一体何を？」

剥き出しの表情を初めて見た気がする。表すのは動揺。期待の類でないのが、少し恨めしい。老若男女が言葉なり、目なりで誉めそやす容姿の女が迫っているのに。

「火、点いちやった。最後までお世話してね」

カチャカチャとベルトを外す。ズボンと下着も下ろす。押し込められていた男性自身半分勃ち上がっていた。

第二章 有閑人妻にバイブを売り込む



人妻にオモチャ 柱を挟み込む。ポタポタ蜜を垂らしている秘部を、背中を逆M字に反らす事で、出来るだけ高く掲げて左右に揺らす。

「ねえ、はやくう」

自分でも驚く程の媚声が出た。その時、じゅぶりっ。

肉芯を入れられた。忘れかけていた刺激だった。

「んっっ、ああ、この感じ……いいっ……感じるわぁ」

尻たぶをぎゅっと掴み、少しずつ分け入ってくる。勝手に目がぎゅっと閉じる。背中が描くアルファベットがよりらしくなっていく。

ゴム越しだが肉棒の熱さが伝わってくる。脈動する血管がヒダヒダを押しつけているのが分かる。生を挿れられていたのなら、既に達してしまっていたかも知れない。

「はぁ、はぁっ……くうっ！」

子宮口をノックされた。一度だけでなく、二度、三度と。偶然ではないだろう。確かめているのだ。奥の突き具合を。

「奥様は感じ易いんですね。旦那様とはご無沙汰でしたか？」

顔のすぐ間近に彼の顔があった。病人を労わる貌をしている。

第二章 有閑人妻にバイブを売り込む

たらどうなるのか。思いを馳せるだけで心がゾクゾクする。

「性交渉が欲しいのなら、旦那様に打ち明けて下さい。他の誰でもない奥様なので、真剣に頼めば応えてくれる筈です」

膣内をじっくりかき回しながら、言葉が続けるセールスマン。夫婦仲について説いている様だが、どうでも良い。

「分かったわ、真剣に頼むから。だから、お願い、今はシて」

「はい。どうかお願いします」

ジユドンツ！

そう例えるしかない勢いで突かれた。ぼやけていた頭がぐらりと揺らいだ。

ジユボツ！ ジユンツ！ ニユジュツ！ ジユプウツ！

猛烈な突き込みが始まった。一回一回、いちいち身体の内部が揺さぶられる。溜めさせられていたジクジクとした肉の鬱屈が甘ったるい搔痒感に転化していく。頭の中が桃色一色に染まっていく。

「あうツ、んああツ、いいっ、奥が突かれて、ゴムで擦られて、アアツ！」

不安定な体勢を安定させる事も思いつかず、双乳と女の細手で鉄棒に縋り続け、若い男の突き込みを受け止め続ける。

人妻にオモチャ

「ええ。最近構ってくれなくて」

そんな事はどうでも良い。早くズンズン突いて欲しい。

膣に肉が埋め込まれた事で空虚感は無くなったが、生まれていた疼きは、激しい出し入れを求める咆哮に変化している。人肌に飢えた人妻の泣き声だ。

「折角、こんなに素晴らしい身体をお持ちなのに勿体無いですよ。セックスレスで夫婦関係がギクシャクするケースもありますから」

彼の腰が動いた。お尻に掌を張り付かせて、ゴムを着たギチギチの分身をゆつくりと往復させる。

ぬちゃ、にちゃ、にゅちゃ、にゅちゅつ。

「あはアーン……っうっ……ああ、太いのが……旦那よりもいいのが、ナカで出入りして、ああっ！」

じわじわとした動きだが、胸が抉られる心地だ。汗が浮き出てくる、肉体の一部を占める男の肉が、肉体の全てを躍らせる。

「もっと、もっと早く、焦らさないで、ねえ」

先にある境地。その存在をしる人妻は、連れて行って欲しいとおもねる。夫に今さされているのと同じ事をされても、ここまで昂ぶるかは怪しい。それ程の威力に導かれ

第二章 有閑人妻にバイブを売り込む



粘着質の汁が元で生まれる、じゅぽじゅぽと言う水音が、男とセックスしている事実を強く自覚させる。尻肉に食い込む指が、その掌から伝わってくる熱が、男の強さを際立たせる。股間同士がぶつかる衝撃で波打つ尻たぶのうねりが心もうねらせる。

「ハア、ハア、あ……あ……アアッ！」

意識が遠くなっていく。絶頂が近いと言う事は、なけなしの理性でも理解できる。しかし、その度合いはどうだ。夫との情事は元より、道具を駆使して自分で登らせた時よりも、ついさっきの技巧者による叩き上げよりもずっと濃厚だ。

身体と一緒に心までバラバラになるのではないかと言う予感が付いて回る。恐怖も感じるが、このままそうなるのなら、それでも構わないと言う感情の方が強い。

息が止まるのではないかと思える程の窒息感。心臓が破裂するのではないかと思える程の動悸。下半身が溶けて無くなったのではないかと思う程の甘美な麻痺感。

「旦那様とお幸せにっ」

「アアッ！」

ビクビクビクビクビクビクウツ！ ドプウツ！

背中が反転した『し』の字を描き、痙攣。下半身では蜜がどっと溢れた。

「ああ……ああ……んんっ……あウツ！」

人妻にオモチャ

撫子が高みから下がって来た時、身体が弛緩し始めた刹那に、ドスツと突かれた。次の瞬間、子宮口に密着したゴム膜が、熱を撒き散らしながら膨らんでいった。どんだん。

(熱いのが広がって……スキン無しだったらどうなってたの……)

ドロドロのマグマが膣内で弾け、ヒダヒダの隅々にまで染み込んでいく光景が頭に浮かぶ。

「ああっ」

膣内でゴムが伸びていく感触と妄想だけで、人妻はまた果てた。

「奥様、旦那様と仲良くですよ」

忘我の境地にいて、全くの無防備となっている撫子の意識に、セールスマンの言葉が流れ込む。彼女は緩んだ顔でコクンと頷た。